2 日目 2025 年 9 月 7 日
午後の部 14:00〜16:30

シンポジウム
家族の「多様化」を再考する
30 年の歩みと新時代の家族社会学の想像力

司会者：平井晶子（神戸大学）・本多真隆（立教大学）・釜野さおり（早稲田大学）・山根真理（神戸大学）

【企画趣旨】

今期の研究活動委員会は、「新時代の家族と家族研究」を共通テーマに掲げて、大会シンポジウムを企画している。3 年目は、1 年目、2 年目のシンポジウム、そして日本家族社会学会の歴史と日本社会の変容を総合的に踏まえ、「多様化」というキーワードを軸に、次世代の家族研究の土台となるようなテーマを設定した。

日本家族社会学会の発足時に有力な枠組みのひとつだったのが、「家族多様化説」である。これは従来の核家族論（核家族パラダイム）を乗り越えるものとして受容された。近年の国内外の家族社会学研究においては、「多様性・多様化 diversity」が重要な用語となっている。

とはいえ、何をもって「多様化」と考えるか、また「多様化」という言葉で何を指しているのかということについては、十分な合意がとられているとはいいがたいのではないだろうか。たとえば 1980 年代の「多様化」論では、「共働き」や「生涯シングル」の増加は予期されているものの、経済的格差の問題はほとんど取り上げられていない。「多様化」という言葉が指す事象は幅広く、その枠組みを共有する機会がなければ、議論の相互交通がとれない場面も多くなるだろう。

本シンポジウムでは、現在は 1980 年代の「多様化」についての想像力以上に、ポスト工業化、グローバル化が進行した時代であると位置づけ、これまでの「多様化」論で必ずしも十分に取り上げられてこなかった、①女性の就業、階層と家族形成、②移民家族、③性的マイノリティと家族、の 3 報告を設定する。コメンテーターは、過去 30 年間の家族社会学の問題関心や実態としての家族変動をグローバルな視点から討論いただける識者に登壇いただく。

「多様化」という問題関心からすれば、①〜③以外にも重要なテーマは考えられるが、研究活動委員会としては、これら以外のテーマも検討したうえで、今回は上記の 3 テーマに設定した。

①〜③のテーマは巨視的にみれば、「第一の近代」から「第二の近代」への移行にかけて目立ちはじめたトピックであるといえる。すなわち、「第一の近代」を形づくった工業化社会においては、国民国家内の中間層の安定とともに、再生産と結びついた異性愛中心の家族秩序の規範が強固になった。しかし「第二の近代」におけるグローバル化の進行とともに、それまで一国内のなかで抑制（抑圧）されていた、階層、エスニシティ、性の多様性に関する課題を避けて通ることはできなくなった。①〜③のテーマについて総括を試みるというよりは、①〜③のテーマを共有し、その連動を考えながら、家族社会学が捉えるべき「多様化」や「家族」について、今後の議論を喚起しうるシンポジウムにすることが狙いである。

日本家族社会学会は、全国家族調査（NFRJ）を立ち上げつつ、近代家族論、家族多様化説を受け入れ、幅広い研究を積み重ねてきた。学会 30 年の歩みとともに進行した、これまで十分に学会で共有されていない「多様化」の実態を踏まえ、新時代の家族社会学が追求すべき「日本の家族」とは何かを考える機会としたい。

（キーワード：家族社会学、多様化、ポスト工業化）